

ヤコブ4章11～17節「なすべき良いこと」

私たちは自分に関わることがうまく進んでいると、知らないうちに高ぶりが起こって来るものです。そして、人をさばいたり、自分の計画通りに事を進めようとしたりします。そのことに自分では気づかなかったりします。けれども、人間関係の問題が起こったり、予想通りに事が進まなかったりして、自分の問題に気づかせることになると思います。そして、神は私たちがどのような態度や心構えを持っていれば良いかをみことばによって教えてくださいますから感謝です。

救われていても罪を犯してしまいやすい私たちを、神はなおも愛してくださり、さらに豊かな恵みを与えようとしてくださいます。6節に語られているように、「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える」のです。

1. 悪口を言ってはいけない（：11～12）

11節。4節では「節操のない者たち」という厳しい呼びかけがありましたが、ここでは再び「兄弟たち」と親しく呼びかけます。兄弟愛に基づいて語り、神の恵みによって救われた者としてのふさわしい歩みについて教えます。

ヤコブが指摘しているということは、当時の教会の中に争いがあり、高ぶる者たちがいて、悪口を言い合うことになっていたのでしょう。「自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです」。これはどういうことでしょうか。

人をさばこうとするとき、私たちは自分が正しい善悪の基準に従って判断していると思いがちですが、実際には、自分の基準や好みによって相手を決めつけることになっていることが多いのです。自分を律法の下に置くのではなく、まるで自分が律法を与えた神の側にいるかのようにになります。さらに、律法は本来、愛、あわれみ、赦しの要素がたくさん含まれています。けれども、兄弟について悪口を言ったり、さばいたりすることは、律法に含まれている神の愛を無視することになります。そのように律法を重んじないで、律法の基盤を無視しているので、律法について悪口を言い、律法をさばいていることになるのです。

12節。人をさばくことができるのは、律法を与えた神だけです。神だけが人を救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばく者は、自分が神に取って代わり、神の権威を侵すことになり、それは傲慢な態度です。

ヤコブがここで取り上げているのは、ねたみや高ぶりから他の人を非難するようなことです。キリスト者はそうではなく、3章17節にある「上からの知恵」によって、考え、語り、行動するべきです。柔和さとキリストの清さを基本として、平和をつくりながら生きることが大事です。そのことを求めるなら、御霊が助けてくださいます。なぜなら、神はキリスト者を、その内に住ませた御霊と共に、ねたむほどに慕っておられるからです。ですから、罪深い高ぶりを捨て、心から悔い改め、神の御前にへりくだるなら、神はその人に豊かな恵みを与えてくださるのです。その人は神の恵みによって神に喜ばれる歩みをするのできるのです。

私たちもこのみことばを聞く必要があります。兄弟姉妹に対して悪口を言ったり、さばいたりすることがないでしょうか。もしあるなら、「あなたは、いったい何者ですか」と主は言われます。悔い改めて、神の御前にへりくだりましょう。神は恵みを与えてくださいます。

2. 高ぶってはならない（：13～17）

13節。今度は、ヤコブは商売人に呼びかけています。彼らは自分の商売についてよく考え、自信に満ちた計画を立てています。どこへ行くべきか、いつ出かけて、どのくらい滞在するべきかを決めて、その商売がうまくいってもうかると予測しています。

14節。「もうけよう」と考えていることを良くないと言っているではありません。ヤコブは計画を立てるときに陥りやすい危険性を指摘します。それは「あなたがたには、明日のことは分かりません」ということです。商売に関する予測だけでなく、人のいのちについても、いつどうなるかは誰にも分かりません。「しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧」のように、人は誰でも一時的なものの、はかないものだと言います。

主イエス様もたとえ話で同じようなことをお話しになりました。ルカ12章16～21節。この金持ちは自分が状況をコントロールしていると考えて安心していますが、神の支配と人生のはかなさを考えに入れていません。

そこには高ぶりがありました。

15 節。「主のみこころであれば」と、主に委ねることが大事です。主のみこころを優先させることです。

これは、自分で計画を立てることがいけないとか、意味がないということを行っているではありません。自分の状態を見極め、周りの状況を知り、可能性を考え、選択し、努力を積み重ねることは大事なことです。

しかし、そうして立てた計画がいつもそのまま進むわけではなく、神のみこころがなることを認めていなければなりません。そして、自分は神のみこころに委ね、従いますという主の御前にある態度が大事なのです。

信仰のない人には、そのような態度は無責任であるとか、自主性がないと思われるかもしれません。しかし、そうではなく、「主のみこころであれば」という態度は、全能の主を信頼し、主の許しの中で自分の責任を果たそうとすることです。めぐみとまことに満ちておられる主が最善をなしてくださることを信頼し、それに従っていこうとする積極的な態度なのです。

ところが、商売に成功し、13 節のように言って、計画を立てている人はしばしば高慢になっていることがあります。16 節。

人が計画を立てる際に神のみこころを考えようとしないうのは、その根底に大言壮語する誇りがあると言えます。自分の能力と努力で成功してきたという誇りがある人は、自分が中心で、神を認めようとせず、神に頼ろうとしません。それが罪の本質です。自慢や自己満足に陥りやすいものです。

もちろん、その人の能力や努力が功を奏したことがあるでしょう。しかし、それらを与えられたことを含めて、物事が計画通りにうまくいったことは、神の恵みによることです。また、周囲の人々から様々な助けを与えられたことによるのです。それも神の恵みによって与えられたのです。ですから、神の恵みを感謝して、神を賛美しているべきです。自分を誇るのではなく、神に栄光を帰するのです。

このように言うと、自分から積極的に行動することはしないほうが良いのかと思う人がいるかもしれないとヤコブは考えたのでしょう。そうではないと言います。17 節。

悪いことを行うことは罪ですが、正しいことを行わないことも罪であると言います。「なすべき良いこと」を行うようにと勧めます。

主イエス様がなさったタラントのたとえ話で、主人から 5 タラントを預かったしもべと 2 タラントを預かったしもべは、それぞれ預かったものを用いて商売をしてもうけました。しかし、1 タラントを預かったしもべはその主人の金を地面に埋めて隠しました。主人が帰って来て精算したとき、預かったものを用いたしもべたちのことを主人は「よくやった。良い忠実なしもべだ」とほめます。しかし、金を隠して用いなかったしもべには「悪い、怠け者のしもべだ」と言い、「この役に立たないしもべは外の暗闇に追い出せ」と言うのです。

このたとえ話もヤコブは思い起こしていたでしょう。神から任されているものを用いるようにと勧めます。そして、この文脈でヤコブが言っている「なすべき良いこと」とは、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」という態度でいることです。大言壮語して自分を誇るのではなく、神の恵みを感謝して、みこころがなされることを信頼して、その日その日に正しいと知らされることを実践するように心がけることなのです。

もし兄弟姉妹に対して悪口を言ったり、さばいたりすることがあるなら、律法について悪口を言い、神の権威に逆らうことになります。「いったい何者ですか」と主は言われます。悔い改めて、神の御前にへりくだりましょう。

また、自信を持って計画を立て、主のみこころに委ねることが欠けているとしたら、自分の力でやってきたという誇り、高ぶりがあるのでしょう。悔い改めて、主のみこころに委ね、従う者でありたいと願います。主が最善をなしてくださることを信頼し、主に従うことができるように祈りましょう。主から任せられたものを用いて、みことばから正しいと知らされることを一日一日実践するように心がけましょう。